

# 医史学と私

田中 祐尾

## はじめに

編集部による「医史学と私」という30年ぶりの企画とのことで、まず指名を受けた「私」であるが、医史学会本部の常任理事として数年間、総会のたびに全国を訪ねまわった記憶が鮮烈で、2007年に大阪で第108回総会・学術集会を主催し、酒井シヅ（この年本部理事長に就任）・蒲原宏・中山沃・小石秀夫・古西義麿・芝哲夫・浅井允晶・Wミヒエル氏らの先達が来阪、大阪市立大学医学部が後援し、会場となり大学同窓の関淳一大阪市長が来場された。因みに新設の医学部6階展示室で『田中彌性園医学遺産』展を開いて稀有な江戸期の地方医学遺産を開示できたことなど、私の医史学の経歴上最も充実した時期だった。文字通り歴史を扱う学会なので北海道から鹿児島県まで出来る限り訪れて医学の事跡と接する作業は誠に嬉しい限りであった。80歳の定年で名誉会員に据えられた「私」だが、居並ぶ先達の中で最も見劣りがする。元々が地方の一郷士（ゴウシ）の末裔であって、自家医学遺産の継承者という「村医者」の子孫、学者の家系というのではない。系図では14代目、初代は豊臣時代で、以後江戸期の積極的医療実績としては8代目という物証が遺っている。

## 郷士（ゴウシ）について

郷士とは江戸時代、身分ある藩士（この地は幕府の直轄地で代官支配だったが）の下働きをしていた下級武士のことで、家紋入りの佩刀が数振り伝わっていて手入れにすこぶる手間がかかる。上級武士の代わりに雑用を、一部で医術などの学問をこなしていたそういう階級の土着民だった。所は河内国若江郡八尾東郷村に在った屋敷で敷地が約三百五十坪、診療所・土蔵・書庫・住居の建坪

がほぼ百数十坪の平屋。庭園・薬草園などの全てを土堀が囲んでいた。後に八尾市文化財保護課の試掘によって、約三百年間に三回の建て替え、または補修があったという。16世紀末に豊臣家没落後、秀吉の弟秀長の領地大和郡山から逃避して来た「家史由緒書き」にある。八尾という土地は古代日本史ゆかりの古地で、西暦587年聖徳太子を戴く蘇我氏が物部氏を滅ぼした古戦場渋川や跡部・二俣・刑部・弓削といった古事記・日本書紀に登場する地名が多く残り、766年称徳女帝を戴いて西ノ京（由義宮・ユゲノミヤ）を開都しようとした弓削道鏡の遺跡が近年発掘された。和氣清麻呂による抵抗がなければ、この西ノ京すなわち八尾の地が一時期我が国の首都になっていた筈であった。この八尾という位置は今でも奈良へ抜ける「八尾街道」や山沿いの「山の辺の道」、「暗がり峠」などへの起点であり、当時瀬戸内と直に接していた難波宮へも一直線の十数キロという交通の要衝であったが、平城宮（長岡宮）から平安京への遷都（794年）以後、俄かに片田舎へと没落する。

## 物部（モノノベ）氏について

物部氏の歴史は古く諸説あるが最盛期には蘇我氏と右大臣左大臣の地位を争い蘇我氏が支持した聖徳太子が頭角を現すまではほぼ宮廷政治を掌握していた。此処では地元の俗説を敢えて取り上げてみる。八尾という地名は元々が矢尾、即ち矢尻のことで、古代の矢尻を始め槍や鉾、鎧や馬具の一部を鑄造・鍛造する技術に長けていて、青銅から鉄への過渡期の先端技術、具体的には摂氏1,000度以上の鑄鉄術を持つ「武器庫」を意味した。八尾では鉄鉱石は採れないから山陰の「玉はがね」を取り寄せるルートを持っていたのかも知

れない。歴史的に鉄の鑄造が進歩するのはずっと後世のことで、おそらく従来の青銅にほんの少しの鉄（砂鉄）成分を混ぜたこの矢尻が抜群の貫通力を発揮して恐怖心を与えたこと、しかしこの時代、量的には革命を起こすには少なすぎたということだったらしい。

何れにせよ武器では劣っていた蘇我軍が何故鉄器具の物部軍団に勝てたのか。蘇我氏は仏教の伝来（538年）後その敷衍に傾注したが、飽くまでも政教分離主義だった。一方の物部氏は儒教という宗教そのものに拘り続け、戦場においても占呪儀式に縛られて俊敏さに欠け、古いオカルトの最中に不意打ちを受け、首領の物部守屋（モノノベノモリヤ）が額を矢で射抜かれたのが古戦場渋川の森だったと記紀にある。

### 儒教について

儒教というのは仏教がインドから中国へ渡ったよりずっと古くから中国人の心に根差した孔子（BC 551～479）の教えであり、我が国へは聖徳太子の時代宗教としてよりも寧ろ治世制度や道徳思想として伝わった。太子が制定した冠位十二階や十七条憲法はその影響による。儒学を日本人が本気で受容するのはそれ以後のことで、平安時代の儒学儒教は菅原・大江・清原・中原といった公卿の家学としてひっそりと存続した。宋学としての儒学は朱子学としての学問体系を整えて、江戸期以降は治世者徳川氏が制度として厳密に利用しつづけて明治に至る。田中彌性園の墓地は七代元允（モトノブ 1728～96）以後十二代太一良まで儒教の葬祭による家族を含めた代々20の土葬墓が（十三代祐三のみが火葬の骨壺墓となっている）高安山来迎寺に一人一墓として存続している。医師の家系としては全国的に珍しい。八代元緝（モトツグ 1767～1825）は当時の中国医書解読の知識を得るため大阪今橋の「懐徳堂」中井竹山・履軒の兄弟学者のもとへ入門、懐徳堂最盛期の教育を受けるうち、儒学に留まらず儒教の神髄にまで触れて家宗の仏教浄土宗を捨て儒教に改宗。東郷村の菩提寺光明寺から辺鄙な山奥の来迎寺に父元允の死（1796）を土葬にして以後現在に至る。広大な墓地

と自然回帰の思想を悠然と伝え続けて現在に至っている。当時も今も儒教の寺（祖廟という）は無く、徳川幕府が江戸昌平坂に湯島聖堂（祖廟）を建てたのが漸く元禄三年（1690）だった。

そんなわけで、この田中家儒教の家族墓はその規模と継続性という点で近年漸く認識を得はじめ、学者識者が中国本土からも訪れている。十数年前、当時の大阪大学加地伸行教授（「沈黙の宗教—儒教」著者—2011『ちくま文庫』）、大谷大学山中浩之教授（「在村医家の形成と儒教」著者—1994『和泉書院』）（「在村医の形成と蔵書」著者—2015『平凡社』）によって実地検分が重ねられた。以後医史学会から小曾戸洋（「田中彌性園文庫の貴重書」2012『杏雨』No 15）・町泉寿郎（「田中彌性園文庫に所蔵される書画と近世京坂の儒学・医学」2012『杏雨』No 15）の両氏が来宅され、土蔵にある古医書古文書を中心に多くの発見がありその著作を残された（上記）。町氏は新婚旅行の初日に小曾戸氏に帯同させられたことが後で判り、よくもまあ花嫁側が許されたものと驚愕した。

地元の郷土史家森田康夫氏による江戸期彌性園診療録の解読（「河内—社会・文化・医療」2001『和泉書院』）もあった。ごく最近日本で三人のみという儒教の研究集団の一人、関西大学吾妻重二教授の直系松川雅信博士が田中家墓地と本家祠堂（仏教でいう仏壇）や『家礼』（家庭における儒教の教典）などを調査されて「儒教儀礼と近世日本社会—閩齋学派の『家礼』実践」で田中家儒教位牌などをとりあげた。

### 田中彌性園（ヤセイエン）の医学遺産 概略

本題の「医史学」への考察であるが、「私」は医史学者ではなく、約四百年の間丁寧に残された医学遺産を未整理のまま蔵の中に押し込めたままだった村医者（今は町医者）の子孫に過ぎない。正確には軍医として第二次大戦中を、戦後は町医者として一生を終えた父祐三（1898～1982）が付箋一枚失わず整理もできなかった昭和世代。祖父太一良（1873～1932）は八尾町長と中河内郡医師会長そして、人力車で走り回った大阪高等医学校卒の開業医として彗星の如く59歳で急死したた

め遺産などの整理整頓ができなかったという明治大正世代。そのまた先代の徳太郎(1853~1905)は最後の漢方医として実兄の寛治郎(1836~1883)と共に明治13年(1880)に受けた西洋医学開業医試験に合格(『八尾市史』近代資料編Ⅲの38頁)。診療の合間に千数百部の貴重医書や古文書をきちっと整理したが、この人のこの仕事がなければ後に世界に三部しかないことが判った貴重な明代医書の存在などが埋もれてしまっていたと思われる。そういった世代。実は蔵の中に押し込めたままといっても現在の土蔵は田中家初代の屋敷ではなく書籍と一部古文書を東郷村彌性園土蔵から移動させたもので、移動に際しては書籍に焦点が当てられたため、随分と貴重な古文書が失われた形跡がある。すなわち現当主祐尾の仕業である。然しながら書籍のうち明代の古医書などの保存状態は極めて良く、先祖の手入れの緻密さがよく解る。虫干し、風通し、しわ伸ばし、綴じなおしなど、古本の保存には随分と手間がかかり、一度怠ると反古になる運命が待っているのである。文政六年(1823)版「続浪華郷友録」に「東郷 緑窓 田中祐篤」の欄に「医を行い時に読書を好み以て蔵書多し」と記され、この時代八代祐篤元緝は医師としてより蔵書家として表記されている。大坂の紳士名鑑といったところの刊本である。

平成9年(1997)5月15日北里大学医史学研究室から小曾戸洋教授と新任で新婚早々の町泉壽郎氏が田中家彌性園書庫(土蔵)を訪れた(上記)。小曾戸氏は古医書を、町氏は書簡と書画を分担され共に古医書研究と古書解説の第一人者が来宅されたことが大きな転機となった。冷静で経験豊富な小曾戸先生が後に論文の前書きに「普通古い医家なら多少はあるだろうと思って土蔵の二階へ上がらせていただきましてチラッと見ますと、あるわあるわ、びっくりして写真を撮り続けました。田中先生はそれを見て呆れられまして、逃げるものではないのでまた何度でも来てくださいと言われたのを思い出します」といった記述がある。結局千数百冊の古医書と桐箱二杯分の古文書や書簡書画類を一旦北里大学小曾戸研究室へ運び約一年数か月の調査分類が始まった。その後武

田科学振興財団の援助を借りて『田中彌性園文庫から見た近世大阪の医学』(75頁)が発刊され小曾戸洋・町泉壽郎そして当主の田中祐尾を加えてもらい、共同研究の形で2011年4月23日武田科学振興財団杏雨書屋講堂での発表となった。

### 田中家彌性園医学遺産 各論

《高醫田中緑窗翁墓》 八尾市大窪来迎寺墓地(上記)にある田中家八代元緝頭彰碑。弟元保とその子元吉によって嘉永二年(1849)建立された石碑で緑窗(窗は窓の古字)は元緝の号。両側から裏面にかけて、それまでの田中家来歴を記す。撰者が幕末の名筆家貫名海屋(ヌキナカイオク)で元緝とは懐徳堂の塾頭としての交流があって、直接石碑建立に際してこの地に赴き、石碑原書や指図している書簡がある。

《彌性園方函・四巻》 安政年間、田中元緝とその子元資二代の共著。伊・呂・波順処方集で春・夏・秋・冬の四冊。それぞれに向く症例と医療の要約を記す。ぼつぼつと「サフラン」「ヒヨス」といった西洋語も混じる幕末の地方開業医向け医療辞典といったところだが、世相が騒然とし出して手書きの原典のまま印刷に至らず、欄外に尚追加の注釈あり、飽くなき意欲を見る。

《銅人形二体》 由来は古く、北宋の医官王惟一が天聖四年(1026)、古来の鍼灸の経絡を『図経』三巻に編纂したが、翌年その354経穴を銅製の当寸大人形の全身に穿ったものを作成。時の皇帝仁宗がこれを全国の医師に配らせたという。現在も台湾を含めた中医の開業医はその医院の前に金銅色のこの「銅人形」をシンボルとして飾っている。彌性園の此の二体は身長約80cmと50cmの成人と小児で、紙製の立体に白シッキイを塗り経穴を赤と黒に分けて記入してある。製造年不明だが我が国へ西洋解剖学が渡来した時期よりもずっと古い時代の製作と思われる。彌性園の医師たちに限らず漢方醫たちの決め技が鍼灸術であったことは確かだった。

《神農図》 推定数十年、または数世紀を経て時々彌性園の診療空間に掲げられていた中国医学の源淵「神農」の絵図だが、長年保存されたままのも

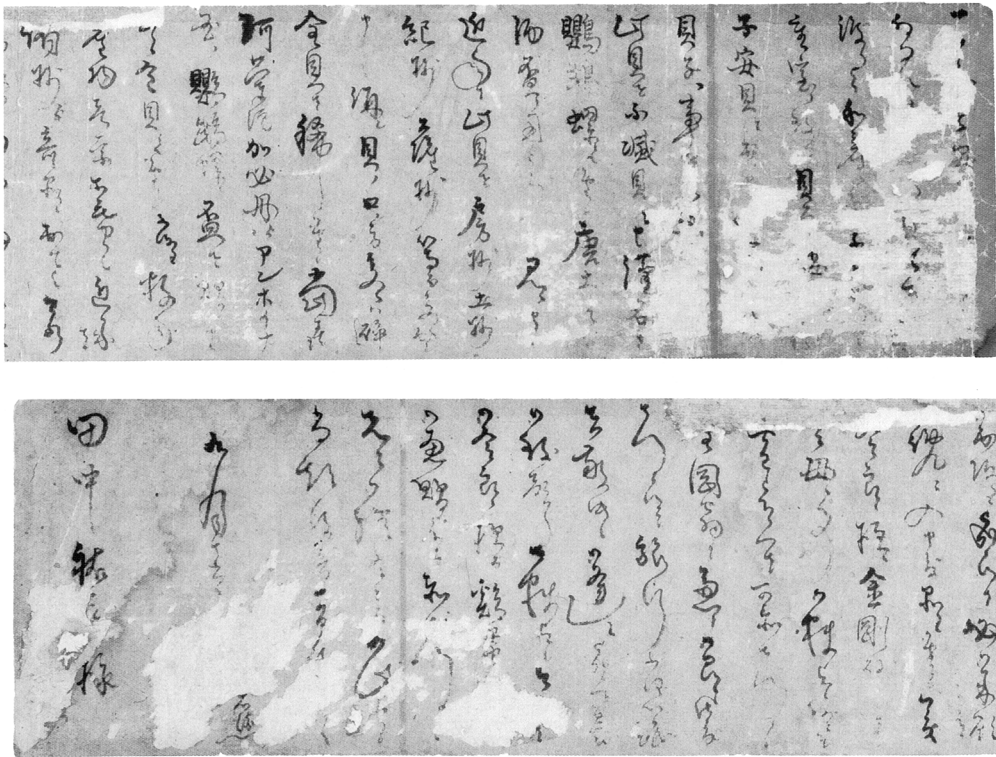


写真1

のを近年町泉寿郎教授によって神農図と判定された。蓬髪に長髯，どうやら角が二本あって正面から睥睨しているが，多くの神農図と比べてさほど怖くない。寧ろユーモラスな感じがする。作者も製年も不明。

《木村兼葎堂書簡》(写真1) 木村兼葎堂(1736～1802)は当時の大坂を代表する文化人で家業は堀江の造酒家。片山北海に経史・詩歌を学び，小野蘭山・稲生若水といった一流の学者から本草学・博物学の知識を得て多くの物産を蒐集，「物産会」「薬品会」を主宰し各地の医師たちへ薬草薬物を提供した。趣味の領域では池大雅に画を，売茶翁に煎茶道を学び「知識と技芸の巨人」として半世紀大坂に君臨した。性格は飽くまでも謙虚で彼の館を訪れた数千人に上るあらゆる階層の人たちに隔てなく応対して，多くの蒐集品を開陳し必要とあれば惜しげもなく贈与した。『兼葎堂日記』には数千人の来訪者の名が記されていて大坂城代やオランダ商館長といった階層に及んでいる。最晩

年に田中元緝へあてた此の書簡には「阿蘭陀加比丹からアンホイナ国の鸚鵡貝など珍品が入ったので一度見に来て欲しい」「金剛砂と雲母を入手したい」「重岡翁とは是非会いたいがなかなか果たせないのでは是非宜しく伝えて欲しい」などとある。鸚鵡貝とは今でも貝の「生きる化石」といわれる原始種でアンホイナ国はオランダがインドネシア香料群島を制圧していたうちのアンホイナ島のこと。彼の貝(殻)の蒐集は全世界百数十種に上り，その全てが現在大阪市立自然史博物館(市内長居公園西南)に収蔵されている。金剛砂は当時顕微鏡の模造に成功していた兼葎堂が更なる性能アップのためにレンズ磨きのための今でいう工業用ダイヤモンドを指し，雲母は対物レンズに接する黒雲母のプレバートで偏光ガラスとしての薄片を指す(推定)。重岡翁とは八尾小阪合村の村医者で元緝の医学の師重岡見昌のことで兼葎堂とは生年没年ともほぼ同じの親友同士だった。兼葎堂が構築した全国物産会(ブッサンエ)・薬品会とい

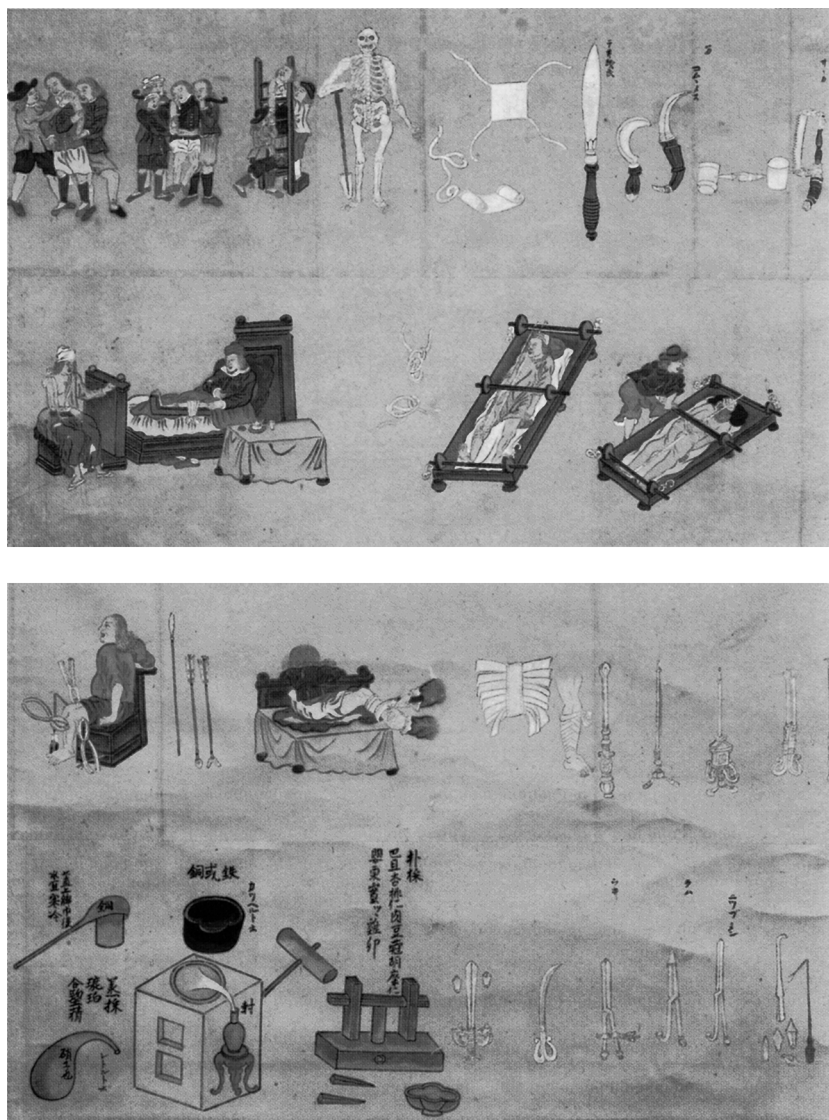


写真2

うネットワークは当時の海外物産を含めた稀品、新薬品、流行品などの展示販売会であって、その河内地方を見昌が受け持っていた。30歳若い元緋は見昌のメッセンジャーとして兼葭堂の館へ頻繁に出入りするうち、お互いの教養と好奇心の波長が合ったらしく、後年兼葭堂に深く寄り添い、寛政元年(1789)、彼が造酒量を幕府に咎められ、伊勢長島に放逐される折には「送別」と題する漢詩を詠んでその悲運を嘆き回生を謳っている(漢詩集『赤水稿』)。村医者としての元緋は物心共に彼

からの援助を受け、特に「薬品会」で薬草の新知識を与えられたことが大きかった。

《オランダ外科図》(写真2) 我が国へ浸透したオランダ医学は既に17世紀前半、主に長崎のオランダ商館の通詞たちが見たオランダ医学書から始まったが、徐々に商館長の江戸参府への途次、即ち大坂と江戸のオランダ商館宿に逗留したオランダ商人や船医たちの持っていた医学書を求めて押しかけた日本の蘭方を志す医師たちの手に渡った経緯があって、その中に杉田玄白らが居た。豊後

中津藩など蘭僻大名たちが半ば強引に求めたルートも大きかった。然しながらその誰もが手にした医学書は、オランダ本国の正規の教科書ではなく航海中または植民地での手引書、携帯書など本来簡易な内容のものが多かった。にも拘らず日本の医師たちの語学は貧弱で内科書の正確な翻訳は幕末の緒方洪庵による「フーヘラント内科書」の翻訳まで待たねばならなかった。一方で商館長付き床屋医者（古くから欧州では床屋が外科医を兼ねていた）が居て、彼らがちょっとした傷の手当てや、時には骨折や脱臼の整復、固定、外傷の縫合、止血、包帯などを披露して関ヶ原以来平和に馴れた日本人を驚嘆させた。一方江戸初期にドイツ人カスバル・スパンベルヘルは江戸参府に随行したのち時の将軍の前で外科医術を披露した結果、我が国に「カスバル流外科」の弟子を養成した。同時期のオランダ大通詞権林鎮山はパレ（仏）の『外科書』、スクレテタス（独）の『外科の武器庫』などから自著『紅夷外科宗伝』（1706）を著し、これが我が国初の外科書となった。全編漢字だが巻末の付図がこの当時ショッキングな絵図となり、これは視覚的に判り易く、むしろ医師以外の人たちによって模写されて図だけが流布した。孫写しやひ孫写しまでが一般人のエキゾチシズムを満たした。彌性園に伝わるこの軸物は採色画を数枚張り合わせたもので原典の絵はパレ外科以来このような彩色画は存在しない。全図の中央に背を向けて座るオランダ人を、彎曲した鎌のような刃物を持って切断しようとする外科医の前腕のみが描かれた図は原本にはなく全て日本人の創作である。有名な立てた梯子に腋下を絡ませて一人が固定し一人が引っ張る「肩関節の脱臼整復」図、ベッドにおける「四肢長管骨骨折の固定牽引」図、後半は薬草薬物の煮沸、圧縮、濾過、蒸留、冷却といった製薬手技。メスやコッヘルや包帯（当時の日本医学では包帯の手技は稀だった）の図など、すべての起源はパレの『De chirurgie』であるとされ、明治以降の輸入品とされる同書1627年刊・アムステルダム版（オランダ語）が遺っている。この彩色画を描いた絵師、表装師・年代共に不明である。

《江戸期彌性園の診療録》 江戸期に我が国の医師たちにカルテを残す制度も義務もなく、明治初期まで医師の国家試験制度もなく、地方の医師たちは独自の倫理と良心の上で働いた。平成十三年（2001）地元の郷土史家で八尾市の参事であった森田康夫氏は未整理のまま保存されていた彌性園の診療録のうち安政六年から慶応四年までの10年間の数百枚を精密に分析し発表された（上記）。「彌性園」と木版印刷された和紙（一面が概ねA4版×2）に、縦に6枠の罫線を引いたもので病名はなく、使用薬剤とその分量と比率、何々村誰れという患者名、余白に「全快」などという転帰が記される。氏名には苗字の無い人も多く身分の隔てがない。転帰の記載はない人が多く中断または死亡を意味する。安政五年から六年はコレラが猛威を振るった期間であった。病名はあったとしても漢方医学による難解な分類だったので、この使用薬剤の処方からの方が却って現代流の病名を付けやすい結果となった。この時代ぼつぼつとカナ書きの「サフラン」「ヒヨス」といった西洋薬剤の記載も増えている。森田氏の分析は細部にわたり、同心円上に住む近隣の患者たちは農民・商人・河川交通や木綿業者、仲買人、鍛冶屋などの工人、知識人などほぼ全ての階層に限なく行き渡っている。木津・仙場（船場?）・太子など遠隔地からの受診は泊まり込みだったのか。来院は家族による投薬の受け取りが多く、多くは駕籠または徒歩による往診で一日数軒が限度だった。医療費の支払いは月払いまたは年末払いが主で、未払いも多かった。内科がほぼ全てで救急患者の救済は村医者たちの連携により続けられ貧しい人たちが多かった。外科もこなしした形跡があるけれども、投薬が主体のこの診療録には載っていない。病型の分類は消化器・呼吸器・産婦人科・小児科・皮膚科・泌尿器科の順で、掲載患者総数は年間約百名。現在常に分類上トップを占める循環器疾患即ち脳卒中・心不全といった疾患は聴診器と血圧計が未だないこの時代、予測と診断ができなかった。この診療録以外に彌性園医院収入簿も見つかり、金銭的に10年間の平均年収は59両と出た。現在の開業医の平均収入と比して高額と

は言えない。金銭以外に「菓子」とか「米札」といった記載あり、米札はコメの引換券と思われ今の商品券である。今も昔も医師への付け届けの風習は変わっていない。普遍性・庶民性・地域性がマッチしたとみえNHKがテレビとラジオにまで再三取り上げて15分間の特集まで組んで発信した。八尾市医師会も大いに面目を施した。

### 田中彌性園文庫の代表的貴重書

《奇効良方》(写真3) 69巻17冊は明の董宿の著。明朝正徳六年(1511)刊本。症例別処方集で米国国会図書館と台湾故宫博物館にしか遺っていない稀少本。

《魁本袖珍方大全》4巻4冊は嘉靖十八年(1539)明朝永楽帝代に李桓らの編纂による傷病別辞典。我が国の曲直瀬道三も自著『啓迪集』に多く引用している。中国にも二点在るのみ。

《仁斎直指方論》26巻13冊は宋の楊士瀛が撰した大型醫方書で景定五年(1264)の成立とされる。元本は台湾故宫博物館に在る。この彌性園本は明朝嘉靖二十九年(1550)刊の翻刻本だが日本でも数部残るのみの稀観本。

《丹溪心法附余》24巻2冊は明の方廣が撰した朱丹溪医学の医学全書で嘉靖十五(1536)年の刊本。同一本が米国国会図書館に在る。

以下明清時代に発刊され彌性園へ渡来した代表的医書のうち書名と発刊年のみ記す。

《醫學綱目》40巻30冊。明朝 樓英。嘉靖年間。  
《薛氏醫案 醫書十六種》16種15冊。明朝 薛己。崇禎元年(1528)年刊。

以下は日本刊行の漢籍本で、中国で失われて日本に残った佚存本(木版)の一つで寛政年間中国清朝に里帰りし、再版輸入された。

《癸巳新刊御葉院方》11巻5冊。寛政10年(1798)木版。原著は元朝・許国禎で御葉院とは宋・金・元の代々王朝の薬務を司った官庁で、その公的処方集ということ。

《太平聖恵方》10巻4冊。崇禎十年(1637)木版。原著は北宋代に陳師文らが勅命によって全国から名処方を集めた100巻だったが20巻以後は写本で残る。

《活人事証方》20巻3冊。年代不明の写本。原本

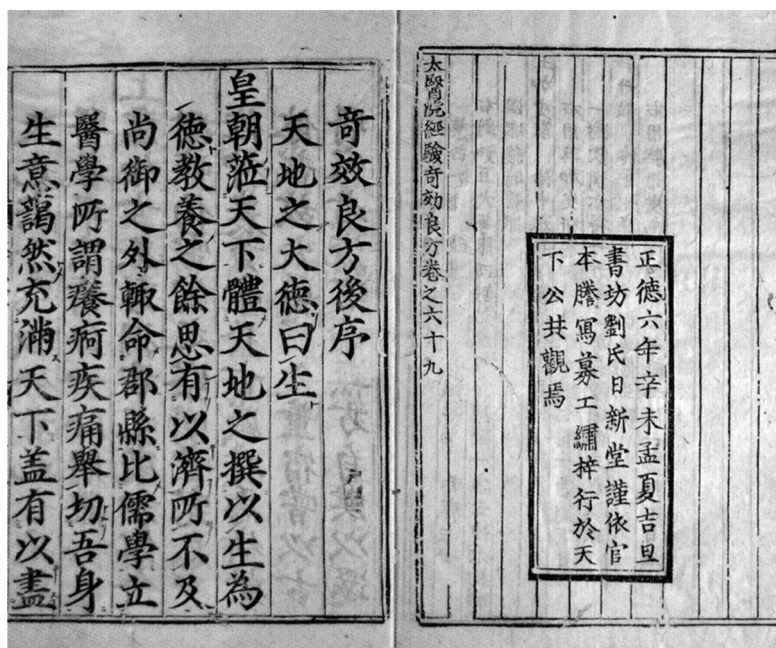


写真3

は宋代劉信甫にまで遡る医書で、我が国へは古くから輸入されて『福田方』や『万安方』に引用されている。中国国内では亡失。

《魏氏家藏方》 10巻6冊。写本（全編筆で手写したものを製本）。原著は宋代魏峴による秘蔵処方集だが中国国内では亡失。我が国には宮内庁書陵部と台湾に一部のみ。

《石室秘録》 10巻10冊。写本。清朝陳士鐸の刊本医書。全巻活字本（元本）を透かして手写したもので一見木版本に見える。恐らく以後出版に至らなかったと推定される稀本。

最後に天下に一冊の日本版医書として

《錦囊眼科秘録》 1冊。岩波の『我が国図書総目録』に「天明三年（1783）大坂出版書籍目録による」一冊とあり今のところ一般の公共図書館にはない天下の孤本ということになる。

以上が田中彌性園文庫にある千数百冊の図書のうち、稀少価値のある古医書の紹介だが、その目玉ぶりはたとえば、既に昭和初期、先代祐三と先々代太一良（八尾町長）の時代に中華民国政府からの問い合わせと向こうの仲介業者または吏員が来訪して、何とか買い上げたいという意向を示したという。彼等のいうには「類まれな貴重な内容だが、医学薬学の内容の難解さに挑むというより、中国語そのものの微妙な解釈が外国人には無理だろう」と述べたという。宝の持ち腐れといっているのである。毛沢東時代の文化大革命をはじめ、中国文明の長い歴史には文化財を根こそぎ消滅させる動乱や革命が重なり、そのためその流出先の日本への亡失文化財のリサーチと買戻しが今でも多いのである。昭和初期にこの「彌性園の稀少本」買収に、当時の国家事業として一万円近くの価格を示したという伝説があり、如何に価値が高かったかが判る。勿論先祖たちは一片の文書すら手放さなかった。

### 屠呦呦女史のこと

今にして思うのは2015年に中国人初のノーベル医学生理化学賞を受賞した屠呦呦（トヨウヨウ）

女史当時80歳の業績である。彼女は新しい発見でなく古い医学文献を徹底的に追究して結果を出したのである。ここ数十年間に中国大陸南部および当時戦争中のヴェトナムではマラリアが猛威を振るい、特に小児の罹患率が年間百万人を超え、数十万人の死者が続いた。特効薬のキニーネ剤が払底し、とくにクロロキンに対する抵抗性が出て効かなくなったことが大きかった。毛沢東政府は医学・薬学者たちに早急の新薬開発を命じたが進展はなかった。屠呦呦は「三無い科学者」がニックネームで「大学院のような高度の研究歴がない（独自のもの）」・「国を出ていない（国産）」・「国立の研究機関に属さない（孤立）」のまま約半世紀、当初毛沢東政権下での科学者は一般労働者以下の階層とされ、敢えて軽視されるという待遇下で、専ら古医書を漁りマラリア患者への処方実験（マウスや自分の身体で）を繰り返した挙句ついに抗マラリア新薬アルテミシニンの抽出とそのデリバティブを合成して劇的効果を上げ、世界がこれを認めたのである。彼女の処方の核心は千六百年前、東晋時代の医書からの薬草（青蒿素）の同定だったという。何故効くかより先に、既存の文書からの「効いたという事実を先ず試す」という逆説的試行を反復したことが成功につながったのである。しかしそれは並大抵の労作と期間ではなかった。伝統と経験を積み重ねることを基本に据えるのが二千年を超える中国人の頭脳である一つの証である。

### 医史学または家史のため来訪した人たち

杉立義一氏は京都府医師会事務局の坂上俊之氏が八尾在住だった理由で同道来宅され「曲直瀬道三 切紙」二通を検分された。平成16年頃だったと思う。序に木村兼葭堂の書簡ほか江戸期文人たちの書簡を見られた。その後京都府立医大で医史学会総会が開かれて、杉立氏の勧めで一例報告をしたのが医史学会へのきっかけとなった。臨床の一例報告は既に数十年の経験済みだったので、そういった点では医史学会への変身はスムーズだった。杉立氏著書『京の医史跡探訪』を読み感銘を受けた。



石田純郎氏は蘭外科絵図、保嬰要綱(小児科書)など見分のため来宅土蔵入りされた

中山沃名誉教授は蘭学関係書、後藤良山医書など見分のため来宅土蔵入りされた。石田純郎氏とは岡山大学医学部での子弟関係。実兄蒲原宏氏に蘭外科図の存在を通知された。

有坂道子氏は木村兼葭堂の研究者で田中祐篤元緝への寛政末期の書簡に興味を示されて解説されたが、調子乗りの私が医史学会で発表した。未だに申し訳なく思っている。

加地伸行阪大教授(当時)は山中浩之講師(当時)の紹介で田中家墓地を検分され儒教式の歴史を確認された。著書『沈黙の宗教—儒教』(2001)に田中家墓地の儒葬墓を写真入りで紹介された。来宅もされ儒教位牌を分解し解説された。余談だが高校卒業(1954)後、私と予備校で一緒だったことが判り昔話に花が咲いた。

脇田修阪大名誉教授は横田冬彦京大教授(当時)と共に平成14年彌性園古書を検分された。横田冬彦著書『読書と読者』(2015)に彌性園図書について記す。

北林千鶴と尾崎良史八尾市史編纂室委員は墓地・本宅を調査し『新版八尾市史—近世資料編2』『新版八尾市史—近代・現代史料編』に初代田中家からの近世史・現代史を詳述、令和2年から3年に発刊された。

## おわりに

以上、田中彌性園醫學遺産から一応の「医史学」上評価されるべき抽出を試みたが何しろ、彌性園そのものを解説するに関しては、墓地に纏わる儒教的遺産も我が家の医学の歴史上省くわけにいかないのが平易な説明に苦労した次第。「私」の説明も本来が学者ではない経歴の持ち主なので大変やりにくく、取り留めない随筆のようになってしまい申し訳ないと思う。近年約30年、多くの識者が訪れて「遺産の継承者」としての立場を何とか保てたのは日本医史学会諸賢によるバックアップのお蔭と確信する。

書籍を主とする大部分は現在「武田科学振興財団杏雨書屋」に移籍保存されている。平成13年田中家の土蔵に雨漏りが生じ、土蔵の建て替えまたは修復業者が絶えつつあることがきっかけだったことをご報告する。

最後におそらく私の世代では最後と思われるこの陳述の機会を与えていただいた「日本医史学雑誌」の編集部に深甚の謝意を捧げて筆を置きます。

令和三年七月末日

彌性園当主 田中 祐尾